

「文芸倶楽部」小説総目録  
その三（明治33年）34年）

山根賢吉編

第六卷第一編（明治33年1月1日発行）

椀久物語	幸田露伴	1	30
旅役者	江見水蔭	31	69
一節切	渡辺霞亭	70	98
乳もらひ	広津柳浪	99	144

（注）「諸国風俗」欄に、紫琴の「札幌風俗」がある。

第六卷第二編 臨時増刊 義士譚雪の梅（明治33年1月10日発行）

「譚談」特集で、小説はないが、目次のみを記すと次の通りである（該当ページは省略）。

赤垣源蔵 三遊亭円遊

大高源吾	不破数右衛門	菅谷半之丞	前原伊助	倉橋伝助	岡嶋八十右衛門	武林唯七	堀部安兵衛	村松三太夫	横川勘平	千葉三郎兵衛	潮田又之丞
松林伯知	錦城斎貞玉	五明楼玉輔	宝井馬琴	放牛舎桃林	柴田薫	麗々亭柳橋	神田伯山	三遊亭金馬	邑井貞吉	神田伯竜	松林若円

三村次郎右衛門 一竜齋貞山  
 寺坂吉右衛門 一立齋文庫  
 大石内蔵之助 邑井 一

(注)「一立齋文庫」は、内題の講演者名は、「一立齋文庫」。「はしがき」に、第五卷第十五編の「講談忠臣蔵」に対し、この号は「義士の銘々伝」であることを記している。

第六卷第三編(明治33年2月1日発行)

爵あたり 塚原波柿園 1 1/40  
 二人爺 榎本破笠 41 1/88  
 雪見酒 広津柳浪 89 1/106  
 夢莪日記 渡辺黙禅 107 1/130  
 関奢待 三宅青軒 131 1/137

(注)「爵あたり」は内題「罰あたり」、「二人爺」は内題「ふたり爺」とあり、後者は戯曲である。「雑録」欄に、鏡花の「古琴」、春葉の「夕月」がある。

第六卷第四編(明治33年3月1日発行)

悠と悠 内田不知庵 1 1/57  
 田舎同化 太田玉茗 58 1/68

假の夫 中山白峯 69 1/88  
 涙の谷 嵯峨の舎 89 1/153  
 (注)「涙の谷」の内題作者名は「嵯峨の屋主人」

第六卷第五編(明治33年4月10日発行)

花ぐるひ 広津柳浪 1 1/41  
 うひ子 中村春雨 42 1/75  
 気まぐれ者 徳田秋声 76 1/116  
 指輪 松の屋女史 117 1/129  
 逆旅 二十三階堂 130 1/144  
 (注)「気まぐれ者」は、内題「気まぐれもの」。「雑録」欄に、緑雨の「つけおち」(上)がある。

第六卷第六編(臨時増刊)購読大岡裁判(明治33年4月20日発行)

「講談」特集で、小説はないが、目次のみを記すと次の通りである(該当ページは省略)。  
 迷子札精神極印 邑井 一  
 黒雲お辰夢の浮橋 三遊亭金馬  
 小間物屋四郎兵衛 一立齋文庫  
 村井良庵 松林伯知

後藤武勇伝

一竜斎貞山

恋娘昔八丈

麗々亭柳橋

葉種屋政談

神田伯山

雲霧高嶺白浪

泰々斎桃葉

嘘吐弥次郎

松林伯円

(注)「黒雲お辰夢の浮橋」は、内題では「黒雲お辰」の部分  
部分が角書。「雑録」欄に、三島霜川の「ひとつ屋」がある。

第六卷第七編(明治33年5月10日発行)

四本の柱 江見水蔭

1 15

雨の月 米光関月

16 58

華族 松居松葉

59 112

夕あらし 上村左川訳

113 142

(注)「四本柱」は、内題に「相換小説」の角書がある。

「夕あらし」は「前書」に「此編の原著者は、パウル、ハ  
イゼにして、作名はMINIKAと題するものなり、原題は作  
中に見ゆる驢馬の名なるを、今改めて「夕あらし」と命名  
せり」とある。「雑録」欄に、緑雨の「つけおち」(上)が  
ある。

第六卷第八編(明治33年6月10日発行)

吉野 三宅青軒

巨人山 佐藤迷羊訳

をさめ髪 永井荷風

四天王 東松露香

つまらぬ人 嵯峨の家

(注)「巨人山」の内題作者名は「ホルソルン著」。  
「雑録」欄に緑雨の「つけおち」(下)がある。

第六卷第九編(明治33年7月10日発行)

唐櫃山 江見水蔭

1 43

紫草紙 磯萍水

44 70

風流鞘当筋 山岸荷葉

71 97

奈良茂 猪波暁化

98 114

無間の鐘 田村松魚

115 134

(注)「風流鞘当筋」は戯曲。

第六卷第十編 臨時増刊 譚談名妓伝(明治33年7月20日発行)

「譚談」特集で、小説はないが、目次のみを記すと次の通

りである(該当ページは省略)。

孝女花扇 松林伯円

名物幾代餅 真竜斎貞水

廓文庫在原 春風亭小柳枝

鏡ヶ池采女塚 一竜斎文車

小紫権八 三遊亭金馬

松葉屋薄雲 松林伯知

三浦屋揚巻 麗々亭柳橋

紺屋高尾 神田伯山

夕霧伊左衛門 放牛舎桃林

山名屋浦里 邑井一

玉菊燈籠 邑井貞吉

巖亀楼亀遊 橋家円喬

奴勝山 三遊亭円朝

(注)「夕霧伊左衛門」の内題は「夕霧」

第六卷第十一編(明治33年8月10日発行)

白衣観音 遅塚麗水

ほつと出 樋口二葉

うき草 神谷鶴伴

1 56

57 75

76 100

帰路 新田静涛 101 111

みやま鴛 田山花袋 112 151

(注)「雑録」欄に、永井荷風の「青麩」がある。

第六卷第十二編(明治33年9月10日発行)

愛の花束 長田秋濤 1 33

うづみ火 星野巴声 34 47

鬼百合 高瀬文淵 48 59

新陰陽博士 原抱一庵 60 130

(注)「新陰陽博士」の内題には「倫敦通信」の角書がある。

第六卷第十三編(明治33年10月10日発行)

しのび音 内田不知庵 1 40

招喚状 生田葵山 41 51

俗音 八木原骸華 52 82

すがた絵 馬場孤蝶 83 95

一念 徳田秋声 96 137

内題は「絵すがた」。

第六卷第十四編 臨時増刊 講談俠客伝 (明治33年10月25日発行)

またもや「講談」特集。目次のみを記す(該当ページは省略)。

幡随院長兵衛	邑井 一
清水の次郎長	真竜齋貞水
奴 お 初	錦城齋貞玉
花川戸助六	宝井琴凌
新門辰五郎	松廼家太疏
江戸の相政	放牛舎桃林
金看板甚九郎	桃 川 実
会津の小鉄	松林伯知
飯岡助五郎	松林伯円

(注)「奴お初」の内題講演者名は、「金城齋貞玉」、「新門辰五郎」の内題講演者名は「松廼家太疎」となっている。

第六卷第十五編 (明治33年11月10日発行)

流水記	江見水蔭	1 ~ 70
義兄弟	藤本藤陰	71 ~ 85

帰 途 大沢天仙 86 ~ 90  
 美人と壮士 嵯峨の舎 91 ~ 148  
 (注)「美人と壮士」の末尾に(上巻終)とある。

第六卷第十六号 (明治33年12月10日発行)

深山がくれ	田村松魚	1 ~ 42
夕 汐	三島霜川	43 ~ 71
みだれ髪	太田玉茗	72 ~ 88
美人と壮士	嵯峨の家	89 ~ 131

(注)「美人と壮士」は、内題には「美人と壮士 下の巻」とある。「瀛海」欄に、荷風の「拍子木物語」があり、「狂歌」欄に鉄幹の作七首がある。後者から二首を抄出しておく。

乙女恋

如何なれば新民法の出にけむなど、乙女は無理な恋する

汽車の別れ

胸を打つ時計の数も十二時の汽車の別れに何と正午か

第七卷第一号 (明治34年1月1日発行)

二日もの語	幸田露伴	1 ~ 11
-------	------	--------

破	垣	内田不知庵	12
紫	娘	渡辺電亭	37
緑	不	広津柳浪	64
	縁		119
			63
			36

(注)「雑録」欄に、依田学海「河内入道」、斎藤緑雨「仕入帳」、大橋乙羽「洋風神と髪」がある。

第七卷第二号 増刊 相撲講談格太鼓(明治34年1月15日発行)

またまた「講談」特集。目次のみを示す(該当ページは省略)。

明石志賀之助	邑井	一
越の海勇蔵	一竜齋貞山	
四ツ車大八	真竜齋貞水	
桂川力蔵	邑井貞吉	
小柳平助	松林伯知	
陣幕久五郎	錦城齋一山	
稲妻雷五郎	松廼家太琉	
阿武松緑之助	桃川燕林	
小野川喜三郎	一立齋文車	
雷電為右衛門	桃川実	

第七卷第三号(明治34年2月1日発行)

妻の心	塚原洪柿園	1
憶梅記	田山花袋	39
金貨と武士	榎本破笠	82
羅生門	樋口二葉	115
曲馬師	江見水蔭	134
		146

(注)「金貨と武士」は、内題に「金貨と武士(喜劇)」とあり、戯曲。「雑録」欄に二十三階堂の「名替狂」がある。

第七卷第四号(明治34年3月1日発行)

八幡の狂女	広津柳浪	1
あき屋敷	上村左川	77
小夜千鳥	永井荷風	103
親子連	柳川春葉	121
		146

(注)「あき屋敷」は、内題作者名に「上村左川訳」とあり、「仏国の作家バルザックが短編の英訳書より重訳せるものにして、原作はAn accursed houseと題し、「医師パシジョンの談話」と注せり」とある。

第七卷第五号 (明治34年4月1日発行)

落花録	江見水蔭	1	69
小高川	藤井紫明	70	84
有髪尼	長田秋澗	85	88
雲のちぎれ	藤本夕颯	89	136

(注)「芸林」欄中に、荷風の「琴古流の尺八」、「雑録」欄中に、緑雨の「仕入帳」がある。

第七卷第六号 (明治34年5月1日発行)

聚楽殿	塚原洗柿	1	38
浮世のしほ	嵯峨の家	39	103
久米仙人	北村馬骨	104	114
無間地獄	田村松魚	115	139

(注)「雑録」欄に、巖谷小波「伯林の大角力」、井上啞々の「春の行方」がある。

第七卷第七号 定期増刊「親ごころ」 (明治34年5月15日発行)

親ごころ	広津柳浪	1	76
六大洲の発見	長田秋澗訳	77	193

女 夫 心 中 広津柳浪 194 ~ 284

(注)「六大洲の発見」の内題作者名は、「仏國ルイ、フイキユイ」とある。「雑録」欄に、藤本藤陰「食客」、太田玉若「浦づたひ」、徳田秋声「醜夜物語」がある。なお、「親ごころ」の後に、「説者諸君に告ぐ」として、「本誌は広津柳浪氏の「親心」を以て一巻とする積りなりしも、其半に於て原稿終に間に合はず、遺憾ながら同氏の「女夫心中」と長田秋澗氏の「六大洲の発見」とを合して第七卷第七号となす。此旨説者諸君に告ぐ」とのことわり書きがある。

第七卷第八号 (明治34年6月1日発行)

紅蓮白蓮	遅塚麗水	1	65
行く水	神谷鶴伴	66	95
心の鬼	岡本綺堂	96	107
島の心中	田山花袋	108	138

第七卷第九号 (明治34年7月1日発行)

湖心の誓	江見水蔭	1	56
西施石磯	萍水	57	82

とりかへ妻 板本 破笠 83  
 みだれ心 徳田 秋声 99  
 (注)「雑録」欄に、緑雨の「仕入帳」がある。 141

第七卷第十号 定期増刊「滑稽道中旅籠」(明治34年7月15日発行)

これも「脚談」特集号で、目次のみ記す(該当ページは省略)。

富士参り 三遊亭円遊  
 提灯に釣鐘 真竜斎貞水  
 雪のとんく 三遊亭円生  
 不味公夜話 桂 文治  
 長短槍試合 五明楼玉輔  
 素人茶番 真竜斎貞山  
 とみ久 三遊亭円右  
 涙と金 三遊亭円左  
 長崎の赤飯 邑井貞吉  
 鹿ころし 金原亭馬生  
 鼻から提灯 柳亭燕路  
 出来心 三遊亭円橘

素人相撲 春風亭小柳枝  
 文ちがひ 三遊亭金馬  
 一心太助 桃川 実  
 厩焼けたり 三遊亭遊三  
 三人心中 松林 伯知  
 三助の遊興 柳家小さん  
 (注)表紙には「旅籠」とある。「雑録」欄に、長田秋濤の「珈琲店頭」、永井荷風の「いちごの実」がある。

第七卷第十一号(明治34年8月1日発行)

夢がたり 幸田露伴  
 渡舟 新田静涛  
 横ぐも 内田魯庵  
 門の扉 太田玉茗  
 玄海選 二十三階堂  
 (注)「雑録」欄に、荷風の「いちごの実」がある

第七卷第十二号(明治34年9月1日発行)

秋の色 広津柳浪  
 借白髪 吾華女史



裸	善	薩	木村小舟	60
お	静	徳田秋声	69	77
小男	爵	松居松葉	78	130

第七卷第十三号 (明治34年10月1日発行)

寂	光院	三宅青軒	1	20
大	師詣	岡本綺堂	21	50
末	広源氏	松居松葉	51	87
お	もかげ	上村左川	88	146

(注)「末広源氏」は内題には、「扇の芝末広源氏」とあり、戯曲である。「おもかげ」の内題作名は「ツルヅ子<sup>子</sup>作」とあり、「原作はCLARA MILICIIと題するものである。編中の主なる人名を日本化したのは、不自然の嫌はあれど、長き露西亜人名の説む人の記憶に不便ならんを恐れてゝある。」と記している。

第七卷第十四号 定期増刊 日本武士 (明治34年10月20日発行)

これも「譚談」特集で、目次のみ記す(該当ページは省略)。

柳田角之進	神田伯山
大川友右衛門	正流齋南窓
伊藤孫兵衛	松林伯鶴
稲垣半兵衛	邑井貞吉
大野九郎兵衛の娘	柴田南玉齋
神田作十郎	一竜齋貞山
堀部妙海尼	真竜齋貞水
松前鉄之助	放牛庵桃林
神崎与左衛門	桃川実
村上喜劔	松林伯知
細川忠興の妻	邑井一
大久保彦左衛門	松林伯円

(注) 目次にはないが、冒頭に大町桂月の「日本武士論」がある。なお「譚海」欄には、「武芸十八般」(黄山生)、「武器の話」(率真生)、「武家の作法」(不通庵)、「武士の家庭」(鉄拳生)、「武士氣質」(菱花生)、「節婦堀六丁」(藤陰隠士)などの解説がある。

第七卷第十五号 (明治34年11月1日発行)

仙 錦 亭 遅塚麗水

第七卷第十六号(明治34年12月1日発行)

転	業	嵯峨の舎	53
榎	笠	有本樵水	93
田舎分限	田村松魚	121	120
		141	92

片時雨	内田魯庵	1	64
風の声	太田玉茗	65	99
狂学士	徳田秋声	100	106
村長	田山花袋	107	144

本目録の作成にあたっては、架蔵誌のほか、日本近代文学館・天理図書館所蔵誌によった。なお、本目録(その一)〔甲南国文〕第三十五号)の「第二卷第九編」所載の「砂の宮 泉鏡花」は、「妙の宮」の誤りである。御指摘いただいた田中勳儀氏に御礼申し上げたい。

(本学教授)